

文献資料翻訳

張文勛《ある白族農村の教育の変遷》

甲 斐 勝 二 訳

翻訳にあたって

ここに翻訳して紹介するのは、中国雲南大学の中文系で長い間中国古代文化及び古典文芸美学の教育研究に携わってこられた張文勛先生の文章である。張文勛先生は、1926年のお生まれだから、今年80歳になる。雲南大学を拠点として活動され、多くの俊英を育成されており、各界への影響力も大きい。古典詩詞の制作もお得意で、雲南詩詞学会の領袖であり、個人の詩詞集も刊行されている。2000年9月には、全6巻本の全集も出版された。今回翻訳した文章はその全集第5巻に掲載されたものである。

張文勛先生は、雲南省に自治州をもつ白族のご出身である。白族は現在白語を話し、白語は北部・中部・南部の3種の方言を持つが、公式の文字を持たない。白語の系統には現在諸学説あって未だ定説はない。白族と漢族との長期の交流から、白語の中には多くの漢語語彙を含むけれども、白語を母語とするものには、漢語の学習はやはり辛いらしい。かつて大理を巡ったとき、付き添ってくれた現地の白族の青年はそう言っていた。学校教育が普及した現在、会話や聞き取りなら小学生でも何とかできるらしいが、文章となると中学校まで進まねば難しいという。張文勛先生もこの文中で少時においては漢語はできなかつたと記されている。

翻訳した文章は、張文勛先生ご自分の経験を通してみた白族の農村の教育史である。雲南省に居住する少数民族が漢文化をどのようにして身につけたか、について書かれており、旧時、少数民族と漢族の文化接触の様子もうかがわれるだろう。とりわけ、児童の時期に村塾において、『三字経』から入り『論語』『大学』『中庸』『孟子』と四書を暗唱し学び進んで行く旧来の勉強方法を経験されたことは、中国の古典研究者の基礎をしっかりと固めたものだと思う。おそらくこのような旧来の学習法で中国古典を習得された方はもはや数少ない。

ただし、この文章を読むときに注意しておきたいことがある。文中に示されるように、白族地域の学校教育は、旧時では『三字経』を、現在では『語文』（所謂国語教科書）を利用して学び始める事になるのだが、文字を持たない白族の子どもは、その文字で書かれたテキストを持たないが故に、自己の言語の学習ではなく漢字漢語の学習から始めることになること、そして学習の継続は漢語による学習の継続を意味するという点では共通するという点である。

ここから、いくつかの問題が生まれてくる。

一つは、現在義務教育制度の普及により白族の子弟が先進文明を語る漢語を小学校・中学校で学んでゆけば、白族の言語の位置づけはどうかという問題である。翻訳文章中「四、一つの白族農村を通してみた少数民族教育の中の幾つかの問題」の中で、張文勛先生は、「直接漢文教材を使用し、漢語によって教学を進めること、それが白族で早くから行われてきたことだ、もしさらに独自の文字を作り、それを学んだ後に今度は漢語文字を学ぶのでは、返って学習上の面倒を増すことになって、学習の進行が妨げられてしまう」と主張する白族知識人の側に立つように見える。その背景には、「白族には自分の言葉があり、たとえ現在の白語語彙の中に漢語語彙が多く混じっているようにも、白族言語の存在の独立性及びその継続使用を変えるものではない」という信念がある。白語の話者は百万人を越えるだろうから、そう簡単には消えることはないだろう。しかし、私の聞いたところでは、都市を中心として白語を話せない若者が増えているし、白族の両親でも子どもの将来を考えて家では漢語を話す場合も多いようだ。漢語を話すことが中国の広領域で活躍する道を広げるからである。よって、漢語の輸入によって白語が変わるのではなく、白語自体が漢語に置き換えられてしまう可能性も又あるのである。それは、白族の消滅にほかならず、文中に示された表音文字を創定しようとする動きが生まれた大きな理由が、この危機感であった。

次に出てくる問題は、漢語の学習で新しい文化を輸入するとしても、自らの文化的な問題は白語の中でどのように検討され熟成され発展させられるのだろうかという問題である。漢語で語られる内容や水準に白語が対応するほどの水準があり白語による理解は可能かも知れないが、白族の文化問題については白語で論じる事ができるのだろうか、論じられるとしても、その結果はどのような形で保存され継承される事になるのだろうか。傍らから見ていると、白族の文化問題は白語ではなく漢語で考えられ語られるように見える。というのは、大理では『白族学研究』という論文集が毎年一冊ずつ発刊されているが、そこに掲載されるのは漢語論文だからであり、白族の文化について個別研究書を出版する白族文化研究叢書もまた漢語で記された書籍だからである。文学史を扱った『白族文学史』*¹の場合でも、漢語文学以外の白語の部分は漢訳して示すことになってしまう。しかし、白族の文学の精華はやはり白語による白語作品であろう。このような、口語としては独自の言語を持ちながら、表記記録は別の言語体系によって為されるという状態は、日本の場合例えば琉球や薩摩方言、或いは津軽方言の中で育った人物が、それぞれの地域の言葉で育てられた文化や文学を、日本の共通語である「国語」で記録し解説し論じる程度であるならまだましとして、時には外語で記録し解説し論議するようなものにもなりかねない、と想像する。白語と漢語のことばの近さから言えば、朝鮮語で日本文化や文学を議じるようなものかも知れない。漢語の側からすれば、漢語で語りうる領域や視野・知識を広げるものではあっても、白語の側からすれば、その発展に対して効果はどれだけあるのだろうか。現在のようにメディアが発達し、漢語文化が映像も踏まえて至る所に滲透すれば、むしろ白語の漢語による置き換わり、或いは白語の漢語方言化を推進する大きな流れの上にあるような気がしてならない。

*1 『白族文学史』(修訂本) 主編張文勛 雲南人民出版社1982

張文勛先生は、別の文章で、白族の文学史を作るために、民間口頭文芸の保存を説き、録音・撮影など方法で第一次資料の作成を説かれる*²。文字を持たない言語の場合、録音か録画かしか伝承の方法ない。国際音標文字が一般には使われることはないだろう。しかし、白語記録のために準備された文字が有りさえすれば、保存もずいぶんやりやすくなるはずだ。そのためにはやはり白語の表記文字の普及を考えるべきであろう。『白族曲詞格律通論』という書籍は*³、白族に伝わる口頭文芸の歌謡形式についての論考だが、そこでは白語新文字であるローマ字表記を用いることによって、白族歌謡をそのまま引用することに成功している。もし、こういった表記方法がなければ、国際音標文字を利用するか、又は漢字の当て字を用いざるを得ず、民歌の引用は面倒になるだろう。母語の文字表記は、外国語の文字表記を覚えるのとは違う。現に話しているその言葉を記す方法であるのだから、習得がそれほど難しいようには思われたいのだが、この新文字の普及運動について著しい進展の報告はいまだない。中国の少数民族の言語文化と漢語文化との関係の複雑さの反映がそこにあるのだろうと想像している。この問題については尚考えみたい。

*² 『張文勛全集』第五集「白族文学研究趨義」

*³ 『白族曲詞格律通論』段伶著1998 雲南民族出版社

ある白族農村の教育の変遷 — 個別分析

張文勛（雲南大学 教授）

はじめに

明の崇禎12年己卯（1639年）3月1日から7日まで、徐霞客は《滇西日記》の中で、彼が雲南の洱源県の鳳羽盆地を訪れた状況を記している*¹。その中には以下のような記事があった。

この村の南側には盆地が開け、その西側が鳳羽山、東側が啓始後山となり、西山と挟まれて南北にわたる大きな盆地を作っており、地勢は広々としている。3条の川が盆地を流れ、南は上馴村より、北はここまでで約20里、良い畑が連なり、谷に沿って集落ができています。くねくねした谷を通って静かな場所に入っていくと、流れに囲まれた高台に村が広がる。古の朱陳村、桃花源などは既に消えてしまったが、この古来の山麓にはまだ残っているのは、大変めずらしいことである。東山に沿って南側にゆくと、新生邑で、五里ばかりゆき、曲がって窪地を西に向かう。窪地を横切って五里ばかり行くと鳳羽山につながる西山の下に出る。ここは舎上盤で、昔の鳳羽県である。（三月初一日）

また北に向かって半里行くと、窪地があり北西山より谷が落ち込んで峡谷を作っている。峡谷を越えて東にわずかに曲がり、山裾を回って三里ばかり行くと波大邑にでる。波大邑は西山を背にして家屋が集まり、この一帯の大集落となっている。村の北に落ち込んでいる谷に従って下ってゆき、河を渡って再び北に向かい丘を越え、三里行き下るとそこは鉄甲場である。谷川が西山より東へと流れてそそぎ、川の両側に家屋が建てられている。…午後、やはり波大邑から流泉洞穴のある山裾を廻って、西に向かい山の脇にある小圓山を探索にゆく。猛烈な風雨におそわれ、びっしょりになって帰る。（初四日）

私が遊記のこの部分を引いた目的は二つある。まずはこれから個別分析しようとする波大邑（また包大邑とも称す）について読者に紹介しようと考えてだ。300年あまり前に徐霞客がこの場所を

*¹ 徐霞客：徐宏祖（1586-1641）、字、振之、霞客と号す。若い頃より旅に出かけ、中国の各地をめぐる、その見聞を記録した日記を残し、そこには明代当地の地理や状況が客観性の高い文章で綴られている。死後に、《徐霞客遊記》としてまとめられた。

《滇游日記》：徐霞客が明の末に雲南を旅したおりの記録。現在は《徐霞客遊記》の中にも所収。以下の日語訳は、《徐霞客遊記全訳》（貴州人民出版社1997）に基づく。なお訳文に出てくる里の単位は華里を示し、1里は約560メートル。なお篇末資料①地図参照

訪れたとき、そこは既に“大集落”となっていたのである。次に、波大邑があった鳳羽盆地を読者に紹介しようと考えてだ*¹。徐霞客は、この村を朱陳村・桃花源*²になぞらえており、そこから山川風物の淳朴さが見て取れよう。

鳳羽は現在洱源県の郷の一つで、つとに南詔時代には既に鳳羽県が設けられ、大理国時代に鳳羽郡に改まり、明代には浪穹県(即ち今の洱源県)に合わせられて、今では鳳羽郷となっている*³。総面積約183平方km、人口28,550人、白族が98.3%を占める。波大邑は鳳羽盆地の西北の角にある靈鷲山の下に位置し、居住者はみな白族で、日常生活ではみな白語を使用する。村人達の生活の中には、白族の先祖たちの古朴な生活の様子をいまなお多く残っていて、ここは典型的な白族村であり、その歴史は長い。白族の子孫はここで生まれ、ここで育ち、代々継続して、農耕を生業とし、自給自足で、質素儉約な生活で必要なものは、穀物で取り替えていた。商売で生活する者は、村の中ではわずかに二・三件にすぎなかった(四〇年代以前の事)。私は1926年この村で生まれ、小さい頃からここで育ち、受けた教育およびその慣れ親しんだ民俗風習とともに白族農村の特色があった。成長すると、中学から大学へと学ぶ機会があり、その後は長い間大学で中国の伝統文化と文芸美学の研究に従事し、また雲南民俗文化の研究にも関わった。文化学や民族学の視点から、私が生まれたこの白族農村の教育の変遷を回顧し研究するなら、我が身に切実な感覚により、民族教育に関わる研究すべき問題を探ることになる。これが私がこの一文章を書いた目的である。

一 清代以前の教育状況

波大邑の教育変遷を検討しようとするためには、まずその概ねの歴史と白族の形成について知る必要がある。この白族の村里が形成されたのはいつごろだろう。確実な資料記事がないので、その歳月を断定することは難しい。しかしながら、六詔時期にはすでに浪穹詔があり*⁴、南詔時期には鳳羽県の記載があるところから推定するに*⁵、つとに唐代には、ここに白族の先祖が生活していただろう。大理国の時期には鳳羽郡が設けられ*⁶、元明の頃にはともに鳳羽県が設けられ、後には浪穹に組み入れられた。宋・元から明・清に至るまで、すくなくとも中原の王朝の漢族の辺境警備隊が大理地区にやって来て、非常に多くの者がこの地に住み着き、中には残留して漢族の鎮をつくった者もいたが、しかし多くの者は土地の白族と結びつき、次第に白族に融合していった。よっ

*¹ 波大邑：現在は包大邑と書く。著者の張文勛教授の生誕地。

*² 朱陳村：唐代白居易の歌「朱陳村」に詠まれた、世間とは切り離されて自己完結した純朴な村。

桃花源：晋の陶淵明の「桃花源」に出てくる隠れ里。

*³ 郷：県の下に所属する行政単位。鎮も同じ。洱源については篇末資料①の雲南省大理白族自治州地図参照。

*⁴ 六詔時代：唐代初め、現在の大理地区にあった六つの部族集団を六詔という。詔は王の意味。

*⁵ 南詔：六詔の一つ蒙舍詔が最も南にあったので南詔と呼ばれたが、その後8世紀始め他の五詔を併合して、全体で南詔と呼ばれることになった。後、貞元10年(794年)には唐から南詔王に封じられている。

*⁶ 大理国：南詔の滅亡後、10世紀中頃、臣下だった段思平によってその後建てられた王国、元のフビライに滅ぼされるまで22代、三世紀以上続いた。

て、波大邑の住居者は主に白族であっても、原籍は南京応天府であると代々自称してきたのである。現在にいたるに、洱源県の中心地の主要な居住者は漢族であり、漢族と白族の雑居の郷・鎮もあるのだが、しかし、鳳羽の各村は皆白族であり、波大邑も例外ではない。村人は皆白語を話し、私自身読み書きを学ぶ前には漢語を話すことはできなかった。言葉と生活習慣及び民俗風習から見ると、ともに波大邑が典型的な白族村であることは明らかである。

波大邑の古い時代の教育の状況は、探りづらいのだが、文献資料から見ると、大理州のその他の白族地区同様、早くから漢文化の影響を受けていた事、これは疑いがない。南詔の“徳化碑”の中には、はっきりと「(儒道仏) 三経を明らかにし、四門に客を迎える」の言葉がある*¹、これは儒道仏の三家の学説を教育の内容にしていた事の実証だといえよう。南詔王の閣羅鳳は、捕虜となった西廬県令の漢族学者鄭回を清平官*²となし、彼に宮廷の子弟教育を依頼した。《資治通鑑》巻233には*³、次のような記述がある。“鄭回、相州の人、経術に通じ、閣羅鳳は彼を高くかって、その子の鳳伽異、及び孫の異牟尋・曾孫の尋夢湊らは皆彼に師事した。授業の時には彼らにむち打つことが許された。”この記録は宮廷の教育であるが、しかし、白族地区の最も早い正式の教育と見なし得るものでもある。異牟尋が即位して南詔の王になると、唐王朝にかつてあった子どもを人質にする規定に従い、唐王朝に対する忠誠を表そうとした。のち、劍南節度使韋皋が「人質」のやり方を変えて、四川省の成都に専門の学校を作り、南詔の子弟を受け入れて勉強させ、“書・数を教え”、卒業すると雲南に戻る、こうやって次々と受け入れて50年続き、南詔のために千人を超える人材を育成したのだった。この正規の教育は、漢文化の学習が主であって、漢文化と大理地区の各民族文化との交流を促進して、大きな作用を起こした。南詔政権は、彝族と白族が主であり、当時成都に出かけて漢文化を学んだ子弟の中には、少なからぬ白族の子弟がいたことは疑いない。白族が漢文化受容したのは比較的早かった、そのため受けた影響もまた深く、歴代少なからぬ文人士が現れている。よって、白族教育の歴史が、唐代にまで遡りうることは疑いない。波大邑は当時の鳳羽県の村里の一つであるから、漢文化の教育を既に受容し始めていたに違いないのだ。

明清の時期は、学校教育的な性格を持つものとして主に3つの形態があった。一つは私人が経営する私塾、二つめは資金をみんなで出し合う形式の村塾、三つ目は半官制の公益事業的な私塾である。清、康熙二十二年(1683年)、浪穹県知事の王度昭(山東蕪城進士)が初めて「義學」を唱えてから、光緒十七年(1891年)まで、全县に義學21館があったが、その中に「鳳翔義學館」がある(《新纂雲南通志》に見ゆ)。波大邑には学館がおかれることはなかったが、しかし、鳳翔は古代鳳羽県の役所の置かれたところであるから、波大邑はその管轄にあり、義學に赴いて勉強した者は必ずいたであろう。後、義學館は書院として建て直され、光緒年間になると、浪穹県には前後して

*¹ 《南詔徳化碑》：現在南詔の大和城跡地に建てられている碑文。776年に建てられたものだが、地下に埋没しており、清朝になって発見される。痛みは激しいが、文章自体は別に記録もあり復元は可能。南詔と唐との関係、領土拡大の記事、統治の様子が記される。(《大理古碑研究》周祐著 雲南民族出版社2002 参照)

*² 清平官：南詔の官名で、国事の軽重を論じ、宰相に当たる官。

*³ 原文は232巻を233巻に誤る。誤植。

7つの書院ができており、鳳羽だけでも2つあった。一つは鳳翔書院、清雍正4年(1726年)義學館の基礎の上に作られたもので、もう一つが波大邑の起鳳書院であるが、作られた年代は良く分からない。当時全県の書院はわずか7箇所すぎなかったが、波大邑の起鳳書院はその中の一つだったのだ。それ以前に波大邑には教育の歴史があって、かなり高い水準にあったことを物語るものである。鳳翔・起鳳の名前は、鳳羽の名前と関係があり、鳳羽の名前は、古代の烏弔山の伝説と関係がある。万曆《雲南通志》の中で言うには*¹、“鳳羽山、一名烏弔山、浪穹県の西南三十里、鳳凰がここで死んだと世間では伝えている。九月、さまざまな鳥が啼き集まり、土地の人々はこれに網をかけるが、珍しい鳥が多い。”この山は、鳳羽西南の羅坪山で、鳳羽の名称は民間の伝説から来たものなのだ、よって、鳳翔、起鳳の語で書院を名付けたのもこれと関係がある。

書院は私塾・村塾に比べて一ランク上の学校で、“生徒となるには、必ず郷里の秀才で学問の深いものでなければならず、自分勝手に人の言うことを聞かない人物が書院に紛れ込むことは許されなかった。”(《新纂雲南通史》*²)書院の設立により、当地のために少なからぬ人材が養成され、雍正から道光年間に至るまで、鳳羽書院のある鳳羽街からは4人の進士が出現した(張綽・施化理・趙輝壁・施寿椿)。波大邑もまた少なからぬ人物を出現させている。私は子どもの頃しばしば大人達が“三代郎官”の物語を語るのを聞いた。この三代の人物は皆外地で大官となり、中には南京で職に就いた者もいるという話だった。単に彼の屋敷跡を見ただけでも、確かに高位高官の家である。屋敷の外には大きな黒石を敷いた道、大門の軒は見事に反り返り、格調高く、中は3つの中庭を囲み、第一の中庭は、大きく高い石の石碑の庭で、第2・第3の中庭には大きな高樓があって、棟木や梁には装飾が為されている。私は幼い頃いつも友達とここで遊んだものだ。垣根や壁も崩れたところが多く、雑草も生い茂っていたとはいえ、昔の豪華なありさまはなおほんやりと見て取ることができた。我が家からほど遠くない場所に広場があって、そこの大門の上にも「進士第」という大きな額があったこともまた覚えている。これらは皆清代の遺跡で、文献の記録はないけれども、波大邑の教育が清代にすでに一定の水準に達していたことを表明するものだと言えよう。

起鳳書院の跡地は今の起鳳小学校で、私が六七歳の頃、書院は元の姿をまだなお残しており、規模は大きくはなかったが、しかし配置は整っており、入口の外に大きな照壁があり、入口を入って行くと、正庁及び両側の廂房があって、三坊一照壁の白族民家建築の形式になっていた*³。さらに進むと大殿があり、中には孔子の塑像があり、大殿の前には煉瓦を積んだ平台となっており、両脇の十段の石段から上るのだ。殿堂は大きくはなかったが、しかし厳粛なたたずまいがあった。毎年農歴の八月二七日は孔子の誕生日で、いつも孔子を祭る式典が行われる。昔はどうやっていたかは分からないが、私が村塾で勉強していたときに何度か儀式に参加したことがある。始めの日の夜、学生の保護者の中から大調理師を選出し、豚肉の煮物を一鍋つくり、香料を加え、味を整える。八

*¹ 万曆《雲南通史》：明の李元陽編、万曆4年の完成。未見。他に清朝にできたものが2種あるので万曆をつけて区別する。

*² 《新纂雲南通史》：未見。

*³ 白族民家建築：一例は篇末参考資料②、参照。

月二七日の未明、学生達は平台の前にきちんと列を作って並ぶ。台上では先生が司祭となって香と供養品をお供えし、叩頭の礼をした後、順番に学生の名を呼び上げて左の石段から上がらせ、孔子像に向かって三度叩頭の礼をする、その後祭主は肉汁を一杯ついで学生に飲ませるのである。聞くところでは、このスープを飲むと、聖人の孔子様は私たちに聡明さと才智を下さり、勉強ができるようになるというのだ。私は、小さい頃何度も飲んだが、とてもおいしかったことしか覚えていない。しかも、聖人の殿上に上って、戦々恐々として、よそ見などできなかった。今思い出しても、やはり神聖で厳かな感じがするようだ。聖人孔子の偶像は、小さい頃からもう心の深いところに刻み込まれていた。これはけっして神に対する妄信ではなく、文化的な崇拜の一種である。私の経験は民国時代のものとはいえ、しかし、書院での孔子を祭る儀礼は、やはり清代の遺風であり、ここから清代以前の波大邑の教育の概略も見て取れよう。

私塾と村塾の教育方式は、書院よりその由来はまだ早かったが、書院が成立して後も、私塾と村塾は併存していた。なぜならば、書院に入る学生は、先ず私塾或いは村塾で二年から三年の啓蒙教育を受ける必要があったからである。私塾は一人の先生が個人的に設けるものだ。自分の家であったり、家を借りたりする。引き受ける学童は一般に四五名で、多い場合は数十人となる。村塾は村の学齢児童の保護者達が主体的に組織したもので、お金を集めて先生をお願いする。学生の人数も比較的多く、十数名から二十名余り、先生も一名から二名であった。文献資料がないものだから、私の上の世代の私塾や村塾の情況はもう詳しく知ることは難しくなっている。

二 民国時代の教育

1. 辛亥革命(1911)以後、辺地にあった波大邑も新教育の影響を受けないわけにはいかなかった。村の中にはかなり長い間新しい形の小学校はできなかったとはいえ、しかし、少なからぬ人物が近隣の鳳羽小学校へ行って勉強した。波大邑の教育について言えば、30年代以前は基本的に私塾と村塾を主とした教育で、知識人は以前より増えたものの、学齢児童の入学の比率はやはり比較的低かった。あのころの時代はおり悪く社会の動乱に出くわし、盗賊匪賊があらこちらに跋扈し、人々は安心して暮らせず、農家の子弟で私塾に入って勉強できたものは、十のうち一名二名もいなかった。だから、外に勉強に行けたものなどさらに希少な存在だったのだ。30年代以後、農村の教育の変化は、私が自ら経験しているので、比較的わかっている。私が五歳となり勉強を始めた頃は、村の中には私塾がまだたくさんあった。その時は既に1931年ごろで、県にはすでに新型の小学校・中学校などがあつたけれども、波大邑では依然として私塾と村塾が併存しており、まだ昔の私塾教育の風貌の幾つかを見ることができた。私が勉強を始めた私塾の先生は、古文を勉強したこともあり、また新しい学問を受けたこともある先生で、名を周学綱といった。家長が私を連れて先生に入門の挨拶をして後、《三字経》*¹の勉強を始めた。一緒に勉強したのは、大体5人程度にすぎない。

*¹ 《三字経》：明代以後の教育では童蒙教育・識字教育のためのテキストとして一般的なもの。三字で1句、リズム良く朗読でき、文語漢語の初期学習に利用された。日本にも輸入されて和刻本が出版されている。

勉強に使う文具もとても簡単なもので、小さな木の板一枚、村の付近で掘ってきた白土に水を混ぜて板の上に塗りつけ、かわかしておいたものだ。授業の時、先生はその日に暗唱する一くさりの文字を朱筆で板の上に書く、その後学生の手を取り墨筆で赤い文字にしたがって書き写す、これがつまり字を書くことを学ぶというものだった。木の板はテキストでもあり、またノートでもあって、一つで二つの役割を持ち得たのだ。こうやって大体一年学ぶと、ようやく木の板は不要となり、丈夫な綿紙をつかった大楷字帖に換えて模写をすることになる。毎日一頁、先生は朱筆で評価を下し、うまく書けた文字には丸をつけ、まあまあ文字には半丸をつけ、間違っているとばつがついた。丸が多い時は、家にかえって卵を一つご褒美に食べることができた。概ね二年ばかり私塾で学ぶと、今度は起鳳書院の跡地にできた村塾へと移った。ここでは既に四書の勉強が始まっていた。《大学》から始まって、《中庸》《論語》《孟子》へと順に勉強してゆく。暗唱以外に、正式な講義も始まった。つまり、白語によってその日に暗唱するテキストの内容を解説するのである。午前中朗読し解釈を聞き、午後は先生の厳しい監督の下で本文を暗唱して解釈を繰り返す。ちゃんと覚えて、解釈も正しければ、授業は終わりで家に戻れるが、さもないと授業の終了が遅れるのはましな方で、ひどいときには罰として跪かされ、物差しで手のひらを叩かれたのだ。このような教学の方法は、科挙時代に、科挙試験に備えて採用された方法を基本的に残すものだろう。私はもう科挙を受験する必要はなかったけれども、小さい頃から四書と古文を勉強することになったし、またいささか《詩経》も学んだと言って好い。

概ね、九歳のころ、家では私を清源小学校に行かせて勉強させた。当時の鳳羽盆地は三つの村に別れ、入り口にあるのが清源郷（清源洞によって命名^{*1}）で、そこにはすでに清源小学があった。中程にあるのが鳳翔郷で、鳳翔小学があり、奥にあるのが起鳳郷で、小学校はまだなかった。私は初めて父母の元を離れ学校に行き寄宿舎に入ったが、幸い従兄弟の張文絢が私と一緒に就学し、週に一回帰省しては、持参した米を炊いて食べるのだった。この小学校は新しい形式で、授業では国文・算数・図画・音楽・体育……正規の新学教育を受け始めたのだと言って好いだろう。一年勉強すると、波大邑にも正式に起鳳小学校が創立される、まずできたのは初級小学校で、まもなく二種の小学校（つまり初等小学校・高等小学校である）に改められた。そこで、私は清源小学校から起鳳小学校に転校し、その学校の初回生となったのだ。初代の校長は名を張藻生といい、字は応枢、村の中では数少ない師範学校の卒業生で、また村では初代の知識人となる人物だった。学校は新しい授業科目を設置して授業を行うだけでなく、新生活運動をも提唱した。たとえば、先生に会えば挨拶する、道は左側を歩く、髪型をきちんと整える、衣服はちゃんと洗濯する、話劇を演じる……これらのことは長い間閉ざされて遅れていた農村からすると、新しい新鮮な空気を注ぎ込んだのは間違いない。

2. 起鳳小学校が成立した後、波大邑の教育事業には大きな変化が起きた。村内の学齢児童のより多くの者が小学校に就学するようになって、家で子弟や親族の子弟を教える者がわずかに残る以

*1 清源洞：鳳羽郷の東南にある鍾乳洞。

外に、私塾がなくなってしまったのである。近隣の村も例えば庄上村・鉄甲村・雪梨村……もまた子女を連れてきて勉強させたのである。私が高等小学校をもうすぐ卒業しようとするとき、学校にはすでに六学年があり、一年・二年・三年・四年はそれぞれ一クラスで初等小学校を構成し、五年・六年それぞれ1クラスで高等小学校を構成していた。それぞれの班は20人前後で、学校全体では既に100人を超えていた。主に波大邑からの生徒である。当時の波大邑は概ね300戸あり、千人あまりの人口だった。小学校教育を受けた児童の比率は、正確な数字はないけれども、しかし当時就学しなかった児童は少数派で、入学率は低いわけではなかったものの、途中でやめてしまうものも多かった。このような情況には40年代になると幾つかの変化が現れる、つまりは起鳳小学校の生徒が増加したことによるのだ。一年生二年生の生徒が多く、三年生四年生が少し少なく、高等部の五年生六年生になると、基本的に各学年1クラスで、各班20人から30人となった。近隣の農村の生徒の多くが高等部で学んでいたが、それはそれぞれの村にそれぞれ自前の初等小学校ができたからである。これがその変化の一つだ。高等小学校を卒業後に中学校や師範学校に進む生徒も過去に比べて増えた。私が高等小学校を卒業したその年に、同村の三・四名が洱源县立中学校の初等三クラスに入学している。これ以前では二人がここで勉強しただけだった。その後、次々と中学校へ進学して勉強する者が続いた。当時、洱源县立中学は初等中学校で、波大邑で中学で学んだと言えば、大多数が初等中学校卒業であった。私の記憶によれば、30年代の村では外に出て勉強する者もかなりおり、その主な場所は二つあった。一つは麗江、一つは大理で、中学校に進学する者もいれば、師範学校に進む者もいた。これらの若者は外地で仕事をする者は少なく、ほとんどの者は村に帰り、学校の教師となった。その中で、私が直接授業を受けた先生には張問一・周啓賢・段受天・張鴻藻・張毓龍等がいた。これらの知識人は昔の学問の基礎を持つ上に、新しい教育も受けており、波大邑の教育が封建伝統教育から新しい教育へと転換する事に対して、指導と促進の作用を為したのである。今日でも、私はこの小学校の時期の先生方を非常に尊敬し続けている。現在まだご存命なのは張毓龍先生のみとなってしまったが、私が村に帰る機会があれば、いつも弟子としてご挨拶に上がっている。この先生方は起鳳小学校で40年代の末期まで教鞭を執られた。この時、学校の教師には近くの村から来た知識人もいた。彼らの多くは中学校と師範学校を卒業した学生だった。1947年、私は高等中学校を卒業した後、病気で大学受験に失敗したため、起鳳小学校で一年教えたことがある。

3. 40年代は中国では激動の時代であったし、ずっと閉ざされていた白族の農村が時代の荒波を受けて大きな変化を起こした時代でもあった。先ず、抗日戦争の火の手が雲南西部一帯に燃え移った。波大邑は直接に戦火の被害を受けはしなかったが、しかし、各方面に影響はあった。とりわけ村内のすくなくならぬ子弟は抗日戦争に参加して、ある者は台児荘の戦役、武漢守備戦等に参加し、ある者は西雲南抗戦に参加して、生命を投げ出したのである*¹。これらの事によって起鳳小学校

*¹ 台児荘の戦役：1938年3月から4月にかけて徐州を目指して南下する日本軍に中国軍が山東省台児荘でぶつかり、中国軍側の勝利となった戦役。

武漢守備戦：1938年5月から8月にかけて行われた当時国民政府の主要機関が置かれていた武漢を守る戦役。

西雲南抗戦：1942年1945年まで、ミャンマーから西雲南に進入した日本軍と怒江を境に行われた抗日戦争。

の教育では愛国主義教育の内容が増やされた。例えば村の中で抗日宣伝活動が行われ、抗日の歌が歌われ、さらに街頭では時事を描く活劇が演じられたのだった。これは、村民にとってはみな新鮮なことだった。抗日戦線に勝利すると、今度は内戦という試練に出会った。学校の教員生徒は直接的間接的に多くの新しい思想や観念を受容する。これらの社会制度の激変によって、時代の風雲は起鳳小学校の教育にも視野を広げさせ、領域を拡大し、生徒達は教室で知識を学びとるだけでなく、さらに見識も増加させたのだ。よって、40年代に起鳳小学校を卒業した生徒の中には、洱源县中学校・大理省中学校・五代中学校などで勉強する者も増えてきた。私より何歳か年上で、「兄貴」と呼んでいた趙懷珍は、鎮南師範で教え、多くの新思想の知識人と知り合いになり、音楽や詩歌についてずいぶん研究した。村に帰るや私や他の学生に大きな影響を与えている。私は文芸創作が好きだったので、彼とは密接な関係があった。私が起鳳小学校で教えたのは1947年で、私の教え子の中には、何人もの才能のある生徒がいて、後にみな中学に受かっている。中華人民共和国が成立した後、彼らはみな文化界でかなりの成果を上げた人材である。これは、波大邑の教育の発展がもたらした結果だと言わねばならない。1948年に、私が雲南大学に合格して、村ではようやく初めての大学生が登場するとはいうものの、しかし、村全体の文化水準からすると、大学生レベルの文化水準を持った人材は少なくはなかった。これらは教育の発展の結果なのである。

三 人民共和國成立以後の教育

波大邑の教育事業は全国同様に、50年代から90年代にかけて、何回もの大きな変革を経験した。曲がり路を進んだと行っても、全体的に看れば革新を続け、発展を続けている。教育体制から教学の内容に至るまで、みな大きな変化が見られる。

1. まず、小学校教育の普及と識字運動の発展である。50年代初期全国で経済発展が繰り返され、全国の人々の科学・文化水準の向上が叫ばれ、科学に向かっての前進が叫ばれ、識字運動が進められて、小学校教育の普及があった。当時の起鳳小学校は規模を迅速に拡大し、起鳳郷（後に公社に改まる）が波大邑近隣の幾つかの村を直轄し、それぞれの村には初級小学校（一～四年生）があり、高等小学校になると起鳳小学校或いは鳳翔小学校に進み、学生数も激増した。この他に、大衆性の識字運動は持続されず大きな効果は挙げられなかったとはいえ、かなりの時間人々の文化学習を励まし、文化的素養を向上させ、一定度の教育を宣伝する作用を果たしている。なかでも、学齢の児童の入学を励ました点に関しては、大きな促進作用を果たしたのだ。50年代後期、及び60年代の後期から70年代に至るまで、比較的長い時間の中、誰もが知る理由のため^{*1}、勢いよく発展してきた教育事業は、重大な挫折を被った。しかしながら、教育は中断されることはなく、苦難の境遇の中で発展してはいたのである。起鳳小学校について言えば、この歳月の間、生徒の来源は減少し、教学の質もまた下がってしまい、生徒の怠慢や退学といった状況も増加してきた。学校の教

*1 大躍進運動の失敗及び文化大革命を指す。それぞれ1958～60、1966年～1976年まで中国に起こった大政治運動。

学設備や校舎の建設にも大きな発展はなかった。“文革”の後期、学校教育に短期的な回復と発展がみられたが、しかし、客観的な条件を顧みず、数の増加ばかりを追求して、初級中学クラス（すなわち所謂“初級中学の帽子をかぶせた学校”）まで開いたが、これらは教育の回復や、教育の提唱に推進作用があったとはいえ、しかし品質の保証はしづらかった。70年代の末になると、人民共和国は、非常に新しい歴史時期に入り、波大邑の教育事業も全国同様に、勢いよく発展を始めたのである。わずか10年余りで、学校の規模と教育の質には顕著な変化が現れた。1996年までで、波大邑の学齢児童の入学率は既に100%（退学率5%）に達している。起鳳小学校には現在338名の生徒がおり、教師は18名、この他に学前班*¹として100名がいる。小学校は6年生で、それぞれの学年が2クラス、全部で12クラスで、学前班が2クラスある。この数字は過去の如何なる時期にも無かったことである。この数年間起鳳小学校の進学率は90%前後で、これはまた教学の質量が上がり続けていることを物語るものだ。校舎建設からみると、政府の支出と人々の拠出で、この15年のうちに前後して新しい教学棟が3棟建てられた。曾ての起鳳書院は、今やしっかりした規模の完全小学校*²となったのだ。

2. 50年代から70年代にかけて、さまざまな問題に出会い、波大邑の教育もまた何度かの起伏に見舞われたが、しかし、教育は決して中断することはなかったし、しかもやはり発展を続けていたのである。ただ発展が比較的ゆっくりだったにすぎない。人材の育成は教育の主要な目的である。人民共和国成立以後の人材育成状況を過去と比べてみれば、波大邑という村を通して全国教育の発展の概ねの状況を見ることが出来る。（当然ながら内地の発達した場所と比べることはできないし、社会発展のかなり遅れた少数民族とも比べることはできない）

20年代から30年代に至るまで、波大邑にはある程度の文化を持った人物がすこしはいた。彼らが受けた教育は基本的に私塾或いは村塾であった。その後、鳳翔小学校に行き学んだ生徒も極めて少なかった。私の実兄張文蔚は村の別の何人かと鳳翔小学校に行き勉強したが、それでも三四名程度である。30年代に村の小学校ができたとはいえ、小学校に入学して最後まで学んだものは最大限見積もって二三十名に過ぎないだろう。一方中学校に進学した者となると、一層数少なくなってしまふ。40年代になると、小学生は人数が増える。なぜならば、村には既に初級・高等の完全小学校があったからだが、しかし、中学校に入って勉強する者は、やはり少数だった。大学生となるとわずかに一名のみである。ところが50年代になると、初等中学高等中学校の卒業生は百を単位に数えるほどになる。鳳羽中学・洱源一中の卒業生が絶対多数をしめるが、外地の中学校を卒業した者もある。これらの中学生は、仕事について後国家公務員になった者もいれば、大学に進学して、卒業後は教師になったり、技術者になったり、政府機関の各クラスの公務員になっている。統計によれば、人民共和国が成立して以来、波大邑では、各種の大学の本科・専科の卒業生は三十四名いる。この数字はこの白族の農村の教育が発展し変化したことを示しうる者である（以上の資料は起鳳小

*¹ 学前班：小学校に入学以前の子どもを集めたクラス。幼稚園にあたる

*² 完全小学校：初等と高等を二つ共に備えた小学校

学校から提供された公文書、小学校教師の李燦陽による抜粋)。

3. 教育事業の発展により、国家の為に人材が養成された。その中でも、大学教授が一名、雲南省社会科学院研究員が一名、州の文聯副議長で雑誌編集長が一名、州教育委員副主任が一名、新聞社編集長が一名、小学校校長多数、県クラス以上の公務員が多数いる。彼らの子女は雲南省の内外で副クラス以上の地位に就き、或いは国外で博士号を目指して勉強している者も多い。さらに重要なのは、昔の波大邑は、文盲が多かったということだ。中でも女性の中には文字を知るものが極めて少なかった。私塾へ行く、後には小学校・中学校で学ぶ機会を持つ者は、やはりみな男性だったのだ。しかしながら、50年代から現在に至るまで、小学校教育は既に普及し、男女の学生児童は小学校に入学する、その中には少なからぬ女生徒が続けて中学校に進学するし、何人かの女子大生もいる。ここからわかるのは、教育事業の発展及び小学校教育の普及、中等教育の拡大によって、波大邑は50年代以来、とりわけ80年以來、全体的な文化素質は大きな向上があり、人々の思想・観念、文明のレベルに大きな変化が起きたという事である。

四 一つの白族農村を通して見た少数民族教育の中の幾つかの問題

雲南の少数民族の中、白族の文化教育の発展はそれ独自の特定の歴史的条件があるので、私は白族の教育モデルによってその他の民族の教育を一概に説明することはできない。しかしながら、白族も詰まるところやはり少数民族であり、白族の一農村の教育の発展を通じて、法則性のある問題を導くことができ、それは少数民族の教育に対して、一定の参考価値を持つだろう。とりわけ現代科学文明の盛んな時代、各少数民族の文化教育の発展と変化は、共に普遍性のある幾つかの問題を備えており、研究する価値がある。

第一の問題：先進的文化に対しての吸収と民族文化素質の向上について。雲南の幾つかの少数民族は、歴史上長期にわたって自然地理条件の制限を受けており、加えて歴代の異民族蔑視政策の影響もあって、比較的封鎖的で遅れた社会環境に暮らしていて、外界との接触が少なく、生産や生活、文明のレベルもかなり遅れていた。このため、少数民族の教育のもっとも重要な問題は、先進的文化を吸収して、その民族の文化的素質を向上させねばならなかったことだ。この事は波大邑の状況からも十分説明できる。白族の文化水準はかなり高く、古来多くの文人士、高級官僚を輩出したばかりでなく、通常の庶民についてもやはり一定の文化知識を持っていた。この事は、この民族が長い歴史的発展のなかで、先進文化（主に漢文化）を吸収するのに長けていたことと関係がある。南詔時代より、白族は中原の漢族との往来は頻繁で、交戦中のころはもちろんのこと、中原の歴代王朝の直轄の時期でも、漢族と白族の人々は密接に交流している。その中で、白族は大量に先進的な漢文化を吸収し、白族の子弟の多くは教育を通して小さいころから漢族の文化典籍を学ぶ事ができ、漢文化の薰陶を受けている。よって、白族の生産活動、婚礼の風習、処世の方式などの各方面では、漢文化の影響を受けた。漢族の封建的礼教、倫理観念などは、白族の人々には揺るぎがたく根付いている。歴史的な観点から見れば、白族の人々はかなり高い文化水準に達しているが、

それは開放的な態度で漢文化やその他の民族の優れた文化を大量に吸収したことと、切り離して考えるわけにはいかない。教育を受ける権利は、各民族とも一律に平等である。先ず先進文化の教育を受容すること、これがそれぞれの少数民族が文化を発展させ、人々の文化的素質を向上させる為には必然の方法なのである。

第二の問題：先進文化の吸収と本民族の文化の継承と発揚について。現在の科学文化の発展において、情報伝達の現代化したがついて、少数民族の伝統文化の消失が導かれるという予想がある。はなはだしきは、未来の文化はきっと全世界共同の世界文化となり、民族文化などはもはや存在しないという人もいる。彼らの説く“未来”の概念は、一億万年それとももっと長いのかも知れないが、私は少なくとも異なる国家・異なる民族が存在するという歴史時期においては、民族文化は必ずやその民族的な特徴を残して人類文化の林の中に存在すると思う。雲南省の各民族はそれ自身の鮮やかな特色を持つ文化によって、雲南特有の様々な姿をとる民族文化の大きな花園を形成してきたこと、これは客観的な事実である。社会の発展に従い、現代化への過程が加速され、各民族文化も交流の足取りを加速しているが、とりわけ漢文化及び国外の新文化に対する吸収が加速され、その民族の文化の変化を促進していること、これもまた客観的な事実である。しかしながら、このような吸収による変化は、決してその民族文化の消失を意味するものではなく、その民族伝統文化の基礎の上に、新しい文化形態を生み出すものなのだ。或いは民族文化に新しい要素が注入されて、そこから新しい発展と変異を獲得するといえるだろう、我々はこれを“転換”と呼ぶ。しかし、この発展と転換が生み出す新しい文化は、必ずやその民族の特徴を持ち続けており、全く新しい次元へと高められた民族文化なのである。白族は漢文化の影響を早くから受け、また周辺国家の仏教の影響も受けた。よって、文化発展も早かったのだが、この事から白族の漢化とを等しいと見なすわけにはいかない。白族の人々の生活・言葉・服装・性格などは、やはり自己の明快な特色を備えており、形態も他の民族文化とは違うのである。現在がかくあれば、将来もまたやはりかくあるだろう。よって、今後の教育においては、必ずやより広範囲に漢文化及び外国文化を学習せねばならない。そうしてこそ、白族の文化にさらなる発展が得られ、一層現代化に向かうのである。

第三の問題：少数民族における言語文字問題について。少数民族の民族弁別では、言語は重要な標識の一つである。民族の中には白族の言語を持ち、またその文字を持っているものがある、たとえば彝族・ダイ族などがそうだ。白族の場合言語はあるのだが文字は持たない、昔少量の文字を持ったことがあるが、みな漢字を改造したもので、文字体系まで形成することはなかった。白族の教育は、唐代以来直接漢文經典を学習しており、ダイ族に貝葉経があり、納西族に東巴経があるように、白族文字の書籍があるわけではない。しかしながら、白族には自分の言葉があり、たとえ現在の白語語彙の中に漢語語彙が多く混じっているようにも、白族言語の存在の独立性及びその使用を変えるものではない。以前、私塾で幼児教育をおこなう段階では、初めから漢文教材を直接利用したが、白語による教学もまた始まっていた（所謂双語制の教学である）。よって、白語に表音文字を創りだし、初期の学習に役立つようにと主張する者がいても、しかし、多くの学者は賛成しない*¹。つまり、直接漢文教材を使用し、漢語によって教学を進めること、それが白族で早くから行われて

きたことだ、もしさらに独自の文字を作り、それを学んだ後に今度は漢語文字を学ぶのでは、かえって学習上の面倒を増すことになって、学習の進行が妨げられてしまう、そう彼らは考えるのである。そもそも民族文字を持つ少数民族にとってならば、双語制の教学を採用すること、それは誠にもっともなことだろう。これらの問題は、それぞれの状況に合わせて行われるべきで、それぞれの民族の現状から出発し、一律に同じことを求めるわけにはいかない。

上に述べた各種の問題について、筆者はまだ深く研究したことはなく、この文章は一つの問題例を提供し、研究者の参考に供することにしたまでである。

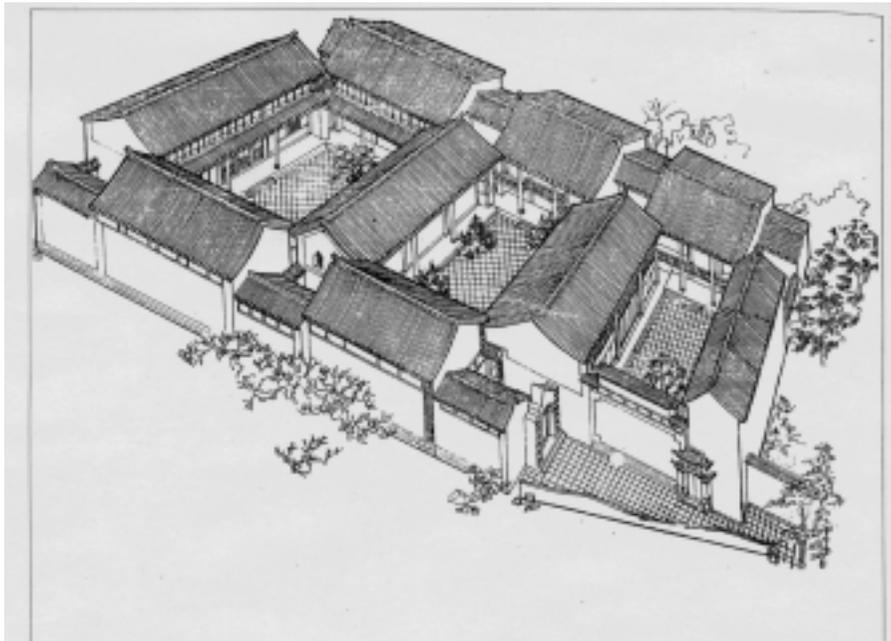
*1 白語表音文字：1957年に文字を持たない少数民族のために文字を創作しようという中国の政策が発端だが、その後紆余曲折をへて、1982年に再開、白語地区の小学校での実験で顕著な成果を上げた。後、方言差を考慮した修正が加えられ、1993年に《白語文字方案》(草案)が完成する。ローマ字を利用した表音文字で、小学校用の教材の実験教材もでき、幾種かの書籍も出版されているが、いまだ実験の段階に留まる。現在では、漢字の篇旁を利用した漢字形式の文字も試案として作られている。篇末資料③参照。訳文中に示される白文字不要論は、それらの実験に対する一つの代表的意見。

篇末資料

- ① 関係地図 大理白族自治州近辺 (《中華人民共和国地図集》星球地圖出版社2000より)



- 篇末資料② 白族の大理の民家 (《雲南民族住屋文化》雲南大学出版社1997 による)



篇末資料③ 白語文字の使用例(1)

《白族民間文芸集粹》(雲南民族出版社2003)より

近年の試用案のローマ字を使用 通常の白文字出版物は漢語訳文を併記する。



白語文字の使用例(2)

漢字の偏旁を使った白文字(古白文)の例(2004/9 李紹尼氏提供)。大理を中心として栄えた南詔・大理王国時に行われたといわれる方法を利用。

